

伊勢本街道をゆく

相可高校の正門前の道は、江戸時代には伊勢本街道と呼ばれた重要な街道だった。この道は、山道が多く難路とされていたが、奈良と伊勢を結ぶ最短ルートとして、伊勢参りが盛んになった江戸時代には、大いににぎわった。

現在、11月20日に伊勢神宮（外宮）から相可高校まで、約20キロを歩き通そうという計画が進行中だ。参加者は、生徒会・運動部を中心に、生徒・教員合わせて約60人ほどになる見込み。このイベントを前に、新聞部では、学校周辺で昔の街道の様子を感じさせるものを探してみた。ここに紹介できたのはほんの一部だが、探せばまだまだあるはずだ。文化の秋、通学路で歴史散歩も良いのでは。
(A.T T.U T.M)



①

↑相可高西門横。ムクの大木の下には塞（さい）の神が祭られている。街道から疫病などが入ってくるのを防ぐ意味があった。その前には自然石の灯ろうがあり、「千鳥瀬 寛政四年」と刻まれている。「寛政四年」は1792年にあたる。

三重の街道あれこれ

江戸と京都をつないでいたのが東海道。現在の国道1号線はこれとほぼ同じところを通っている。この東海道から、日永の追分（四日市）で分岐して、海沿いに南下するのが伊勢街道だ。伊勢参りのブームによって、大変にぎわった道である。

伊勢参りを終えた人が、そのまま熊野へ参拝するという例も多かった。その時に使われたのが、田丸から三重県の南端、鶴殿（うどの）を通過して熊野へ向かう熊野街道だ。

他にもこの近辺には、松阪と和歌山を結ぶ和歌山街道が通っていた。松阪は紀州藩の領地であり、この道は、紀州の本拠地和歌山と松阪を結んでいたためである。国道166線のルーツがこれだ。



↑地図内の数字①～⑤は、写真の大まかな場所を表します。

伊勢へ！熊野へ！ 宿場町・相可

伊勢本街道は、奈良の榛原（はいばら）から三重県的美杉町に入る。そこから飯南町に出て、津留の渡しで榎田川を越え、相可・田丸を通過して伊勢に至る。伝説によれば、初代の斎宮と伝えられる倭姫命（やまとひめのみこと）が通った道なのだとか。

相可はこの伊勢本街道の宿場町として栄えた町だった。相可高校の近くにも、かつては大きな旅館があったそうだ。相可には、もう一つ大事な道があった。松阪から射和・相可を通過して、柄原で熊野街道に出会う熊野道（くまのみち）である。

今でも、伊勢本街道と熊野道が交わるころには、古い道標が立っている。道の正面には「伊勢本街道」、西側には「右くまのミち」、東側には「すぐならばせ道」と刻んである。両郡橋から相可の方へ入ってすぐ、「まつかさ餅」で有名な「長新」さんのすぐそばである。すぐ見つかるので、ぜひ自分の目で確認してほしい。



②

←手前が「はかり石」。湾台風の後、修復された。伊勢

川止めの目印 「はかり石」

昔、榎田川は舟で渡った。今の津留橋のあたりに渡し場があった。川の中には「はかり石」という岩があり、岩の上に切り石が埋め込んであった。川の水量が増えて、この石が水没すると、渡し舟は出せない。いわば危険信号だ。旅人は、天候によっては、1日、2日と足止めを食うこともあった。この「川止め」のため、津留でも何軒もの旅館が繁盛していた。



③

←仏様の足をかたどったという仏足石。天明5年（1785年）に建てられたもの。旅人はわらじを奉納して、旅の安全を祈った。今でも何足かのわらじがかかっている。以前は別の場所にあった。

昔の面影残す道

→歯痛（はやめ）地蔵。歯の痛みにご利益があるとか。



④



⑤

←四疋田の常夜灯。弘化2年（1845年）に三谷蒼山の遺言によって建てられたもの。三谷家は、代々津田・相可・佐奈・勢和にわたる32村の大庄屋であった。昔は現在の位置よりやや北よりにあった。

参考：多気町・多気町教育委員会編『多気町史』『わたしたちの多気町史』・みえ歴史街道フェスタ実行委員会『みえの歴史街道よみある記』・<http://homepage2.nifty.com/kaz-iku/ise128.htm>

編集後記：お陰様で、新聞部は今年の三重県高校新聞コンクールで最優秀賞を受賞しました。3年連続です。評価されたのは嬉しいのですが、良い結果が出れば相応のプレッシャーがかかってくるわけで…。これからがかなり心配です、はい。さて、今回素敵なイラストマップを描いてくれたのは2Aの永田珠美さんです。どうもありがとうございました！（A.T）